

# 露國戰勝笑話

骨皮道人

○骨皮道人の言  
 露國の國の地勢兵が、我々毛又似たる雪の中  
 で、鳥の鳴すをゆけば、甲冑が危ぶ  
 怖も危ぶと云ふので、我々も豆銃砲を擔  
 いて、鳥餘くと危ぶして来へ来たりの  
 の、雞又殺せ年中しやも食て顫へて居る  
 やうな鳴だから、すめくと云たからって、  
 第一軍艦でさへ凍り附て殆どかたし、  
 ヤット路へ出てきたと思やア、日本の露  
 千種や速者の為め、喜沈と蹴おされ  
 て仕舞うし、殊も日本の軍人ハ、一命を  
 鴻毛より軽んずると云ふのだもの、そん  
 左大膽な軍勢は出會た日やア、露の  
 一声響き取られた油揚げだ、夫だから、  
 総督も、首を擡つて居るさうだが、  
 何うしても、振り振りの利かあるおとし  
 だなア、西ナリニ鴨ウツリハない、どうせお  
 なまは、雲雀ついて居たって仕方がないか  
 ら、先つ此國をつばめて日本の風風へ引渡  
 して仕舞て、我々の居るは迷ふだけの事サミ  
 ね、おから、居た鶴が「お結構、コー」。



明治廿七年三月五日印刷 今年三月十日發行 西條印局兼發行所 東京市浅草區南元町十五番地 牧金之助

曲豆